

静岡県立大学短期大学部  
特別研究報告書(13・14年度)-70

## 知的障害児の保護者と健常時の保護者との健常児の保護者との歯 科保健に関する意識の違いについて

海老名 和子

The Difference of Oral Health Survey between  
Mentally Retarded Children and Schoolchildren

**EBINA Kazuko**

13年度に惹き津好き今年度は健常な小学生の保護者へのアンケート調査を行った。しかし標記のように保護者の意識の違いまでを分析するところまで達成しなかった。今年度の報告は、今年度時実施した小学生の保護者へのアンケート調査から小学生の歯科保健に関する実態を報告する。

この報告は、平成14年度静岡県立大学短期大学部研究紀要に掲載した『小学生の歯科保健に関する実態についての一考察』とほぼ同様である。

### はじめに

近年の我が国は、少子高齢化の進展を背景に社会構造全体が大きく変化している。それと同時に社会構造を取り巻く環境も変わってきている。そのような状況から21世紀の健康施策として「健康日本21」が提唱され「疾病」から「健康づくり」に重点が置かれようになってきている。そして児童・生徒の心身の健康面での現状は、必ずしも楽観的ではなく、今後21世紀を担う児童・生徒の健康づくりをより推進して行かねばならない。そのため「健康日本21」の中でも歯の健康について取り上げており、学童期の児童についてはう蝕予防について挙げている。具体的には現在12歳でう蝕罹患数が1人平均2.9歯となっているのを2010年には、1歯以下にすることである。現在乳幼児、学童期のう蝕数は、う蝕の洪水状態であった以前に比べ明らかに減少傾向にある。しかし欧米と比べるとう蝕罹患率は、まだまだ高いのである。この現状を打破し指標の目標に到達するためには、フッ化物の利用、食事特に間食のコントロール、歯垢清掃技術の向上が必須である。そしてこれらを実施するためには行政が行う健康施策や地域、学校、家庭が連携を取り推進

めていかねば成らない。特に年齢を考えると家庭の影響が大きいと考えられる。そのため保護者の歯科保健への理解や、歯科に関する知識が必要となってくるのである。

そこで今回小学生のいる世帯にアンケート調査を実施し、小学生の歯科保健行動の実態と保護者の歯科に関する関わり方等について調査し家庭での歯科保健の実態を把握することとした。

## 目的・方法

- 1 目的：小学生の歯科保健行動の実態と共に、小学生を持つ保護者の歯科に関するかわりや、保護者の歯科に関する知識レベルの実態を把握し、今後の児童・生徒の歯科保健の進め方を検討する。
- 2 対象：S市M町の小学生のいる家庭の保護者72名  
アンケート記入者の内訳は、表1のとおりである。

表1 アンケート回答者内訳

回答者内訳	構成比
父親	2.8%
母親	94.4%
祖母	2.8%
祖父	0.0%

- 3 方法：無記名式の記述式アンケート調査を実施した。  
アンケート項目のカテゴリーは、児童の歯科保健行動の実態、児童への保護者の関わり方について、間食について、保護者の歯科保健の知識について、保護者の歯科保健行動と歯科保健に関する知識度についてである。その中で今回は、保護者の児童への関わり方について、保護者の歯科保健行動の実態とどの程度歯科保健の知識があるかについてである。
- 3 時期：平成14年7月

## 結果

小学生の歯科保健行動の実態では、歯みがき状況について毎日歯みがきするのは、79.2%であり、毎日磨かないで時々磨くという児童もいることがわかった。また歯磨きの時間帯としては、朝食後が最も多く76.4%であり、ついで就寝前の72.2%、夕食後15.3%となっている。歯磨きする時間は、1～2分が45.8%で2～3分が29.2%、1分以内が22.2%であった。

図1 小学生が歯磨きする時間帯

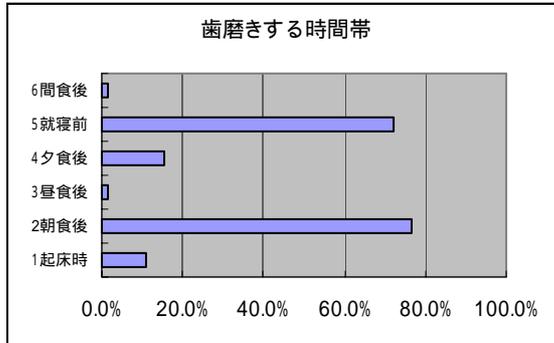


表 2-1 歯磨きの状況

毎日磨いている	79.2%
磨かない日がある	16.7%
自分で磨かない	0.0%
無回答	4.2%

表 2-2 小学生の歯磨き時間 (%)

3分以上	2.8
2～3分	29.2
1～2分	45.8
1分以内	22.2

児童への歯科保健の関わり方については、児童の歯みがきの主な援助者は圧倒的に母親であり 95.8%であった。次いで 15.3%が祖母、8.3%が父親となっている。また子供の歯みがきについて工夫していることは、「声掛けをする」が最も多く 65.3%であり次で「一緒に磨く」が 9.7%である。子供の歯磨きをしてあげるかという質問では、「仕上げ磨きをしている」保護者はそれほど多くなく 16.7%であり、それに比べ「以前はしていたが現在はしていない」保護者は、58.3%とかなり多くなっている。また「点検だけする」は 15.3%で「仕上げ磨き・点検はしない」保護者も 15.3%あった。このことから子供が小さいときは親もしくは家族が歯みがきに関して関わるべきと考え子供への歯磨きを実行している人が多いことがわかった。さらに仕上げ磨きをいつまでしていたかという質問では、最も多かったのが小学校に入学前までで 65.3%であった。時間帯としては、仕上げ磨き・点検をするのは就寝前が一番多く 76.5%であった。その他としては夕食後、朝食後となっている。そして子供の歯肉が気になる保護者は 18.3%、少し気になるが 31.9%であり、半数以上の保護者が子供の歯肉が気になっていることがわかった。さらに歯肉が気になる保護者は、学年が高くなるにつれ多くなっている。しかし子供に定期的に歯磨き指導を受けさせたい

4

と考えている保護者は 41.7%であり、一番多かったのはどちらでもよい保護者で 44.4%であり、子供の歯肉は多少気になるが定期的に指導を受けるほどではないと考えており、保護者にそれほど問題意識がない結果であった。

保護者の歯科保健の知識については、永久歯の数など8問を出題した。質問内容と保護者の正答率は、表のとおりである。

全体の正答率は %と比較的高い結果となった。8問の中でもっとも正答率が高かったのは「だらだらおやつはう蝕の原因」で98.5%とほとんどの人が理解している。正答率が最も低かったのは、逆質問の「歯ブラシは3ヶ月で交換」で50.0%であった。

保護者の歯科保健行動については、児童と違い全員が毎日歯磨きをしていて、歯磨きの時間帯は就寝前が最も多く%、次いで朝食後が%であった。また昼食後、夕食後、間食後に歯磨きする人も児童に比べ多くなっている。そして歯科保健指導を受けた経験のある人は%と半数弱あるが、歯科保健指導の経験があるものの定期的に歯科検診を受けている人は、少なく%であった。そして定期的に歯科検診を受けているのとほぼ同数が、補助的の清掃用具を使用している結果となった。

図2 保護者が歯磨きする時間帯

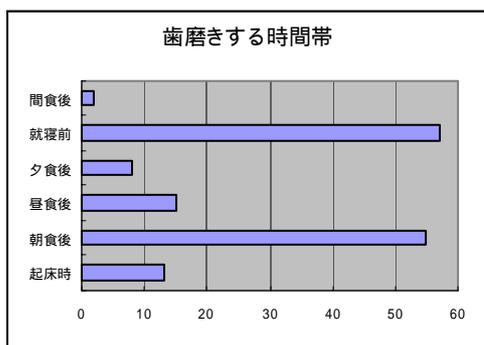


表 5-1

定期的に歯科検診を受けている (%)

はい	13.9
いいえ	79.2
無回答	6.9

表 5-2

歯磨き指導の経験がある (%)

はい	41.7
いいえ	50.0
無回答	8.3

表 5-3 補助的の清掃用具を使用している (%)

はい	16.7
いいえ	76.4
無回答	6.9

## 考 察・まとめ

今回行った調査の小学生の歯科保健行動では、毎日歯磨きするのは79.2%であり毎日歯磨きしない小学生も20.8%もいることがわかった。そして歯磨きの時間も1~2分が最も多く小学生の歯科保健行動の実態は、決してよい状況とはいえない。この状況は、今後新たなう蝕の発症を予測させるだけでなく、歯肉炎の発症も十分考えら歯科的に問題が多い実態である。う蝕予防、歯肉炎予防に有効である夕食後もしくは就寝前の歯磨きの大切さを、小学生自身が十分理解しなければならない。そのためには小学生にいろいろな場面で歯科保健指導を繰り返し実施していくことも必要であろう。また今回の調査結果では、ほとんどの児童が昼食後に歯磨きしておらず学校も協力して給食後の歯磨きタイムといった形を作るなどして児童に昼食後の歯磨きを励行するなどが必要であると考えられる。

保護者の児童への関わり方は、母親が主な歯磨きの援助者であるが圧倒的で父親が関わるケースはほとんどなかった。これは子供の日常生活全般に深く関わっている母親が、その延長線で歯磨き等の歯科保健についても関わっているためと考えられる。しかし児童の歯科保健行動の実態の悪さを考えると、今後は父親の関わりがもっと必要ではないかと考える。保護者の具体的な関わり方としては、歯磨きをするように声をかける場合が65.3%と多く、仕上げ磨き・点検をしているのは、16.7%であった。しかし仕上げ磨き・点検については、小学校入学まではしていた保護者は58.3%あり幼児期までは仕上げ磨き・点検をしなくてはと考えている保護者が大半であった。子供が、小学生になりある程度は自立できる、また自立して欲しいという願望から小学校入学と同時にしなくなったのではないかと考えられる。また子供の歯肉については、少し気になるも含めて予想外に多く過半数が気になるという結果であった。これは常に子供の口腔を常に意識しているということも考えられるが、実際に歯肉が腫れて炎症があるということも考えられる。小学生でも高学年になるに従い歯肉炎、歯周炎についての指導を行うことが必要である。しかし理解を深めるには指導の回数や集団指導だけでなく個別の指導が必要である。また小学生の歯科保健行動を変えていくのは大変なことである。

保護者の歯科保健の知識は、正解率が高く鹿の知識レベルがある程度高いことがわかった。これは保護者の約半数が歯科保健指導を受けた経験があるためと、テレビなどのコマーシャル等の影響ではないかと考える。しかし具体的には人さまざまであるため個別に適切に指導していくことが大切である。そのためには小学生だけでなくその保護者への歯科保健指導も不可欠である。特に混合歯列期は、口腔内が複雑で清掃が難しい状態である。そのため保護者による点検・仕上げ磨きというものが必要になってくる。そのためには小学生の時期の口腔の知識等も把握してもらい子供達の支援をしてもらうことが大切である。また学校側も歯科に関する理解を深め連携をとりながら、小学生のう蝕罹患率が低下し、口腔の健康が保つようにアプローチしていかねばならない。

(2003年3月19日受理)